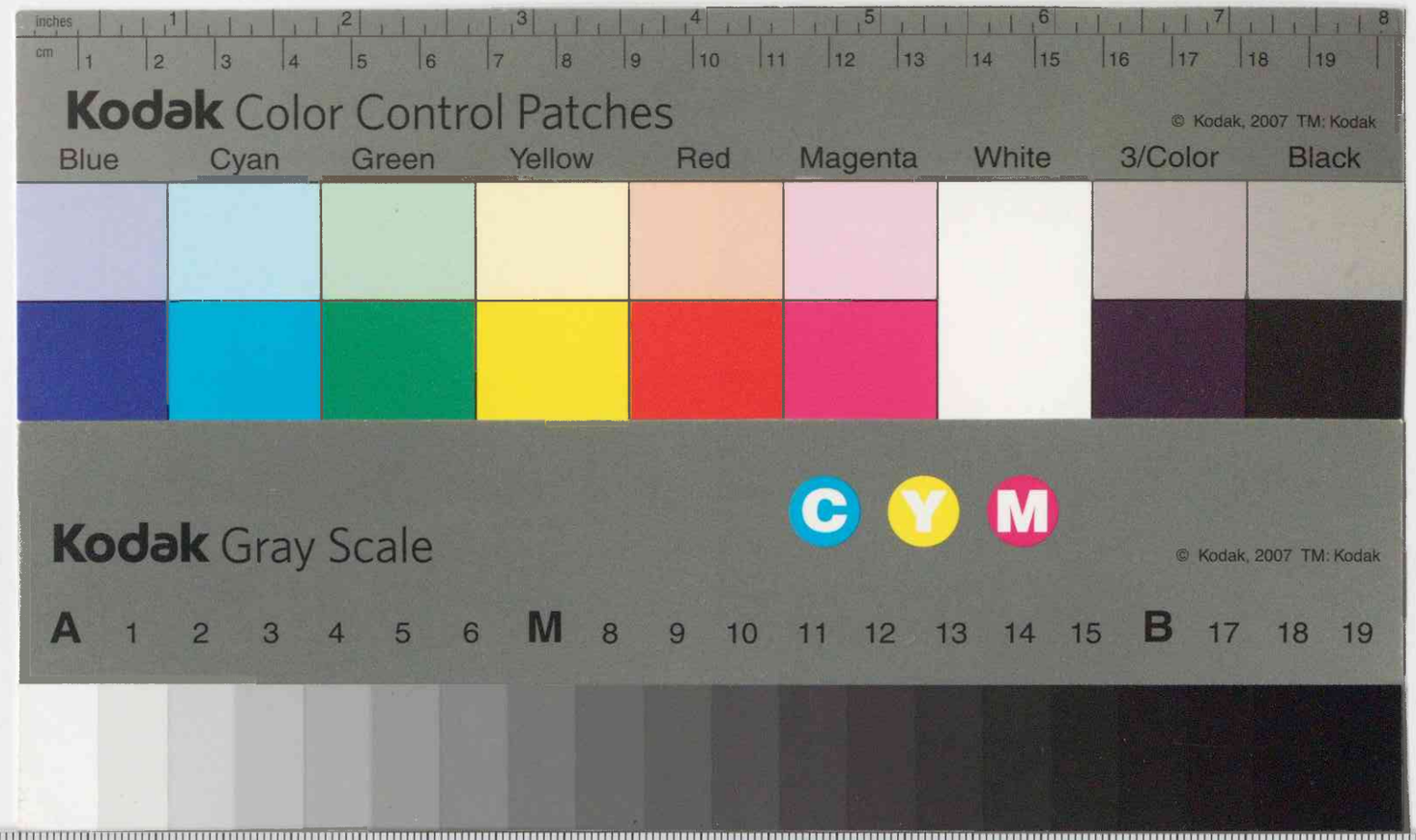

inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Kodak Gray Scale
C
Y
M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

南總里見八犬傳第三輯卷之五

東都　曲亭主人編次

第廿九回

雙玉を相換く類藏類を識る
兩歔ㇾ相遇て義奴怨ㇾ報ふ

濱路ハ事の趣を佗のく小歎ㇾ息ハ十寸鏡影を沿認ぬ家父家毋のなく名告
ㇾ兄道節ㇾいふも切なる言の葉も露の玉の緒引とゞめられて憂時苦痛を忘
まそ〳〵情願ハ〳〵ㇾ稱へども又想像る良人のゆくゑ宿業のまゝ竟ふかゝる非
命ハ実の母ぢ造ㇾ罪よ報ひ来く妹伏の契ㇾ淺茅生ㇾ小里ㇾ屍ㇾ曝ㇾ
らんさまゞハ因果の理りふ悟の窓を開けどもなほ〳〵ㇾ曇る胸の月晃類悩乃山
の枝ㇾ碎けく落る涙の瀧のちそぢの兄と今さらふ面あらぬも恥〳〵又淺
ましく哀ー〳〵ふのみ〳〵弱る命根の今を限ㇾ上言遂さんとやう〳〵ㇾ

くも頭を擡ぐと苦しげも息吹吻れ原来もん身ハこゝろハう家兄欤仇さへ殺さく
ゐつゝ。そのうれ欤抱いあるを別さの今般の對面現さぐうゝき限ゐも待う
と慕ゝく年月とある今のる今さゝふ欤うゝ衰ゝれ家ゐの陣歿ゐれ名を
あるハせめくめの心あるゐも待るるの産の恩の縁高紀実の親を忘さく過さぞ
人と生れ甲斐あるゝゝと思へ悲ゝくるのうゝく神も佛よゝ欤あハせ祈盡ゝく
物体ゐくも恨ゝーるの待ゝーふ絶ゐんとゐる息の内よその願るの綱ひゝーを
神の冥助欤佛の慈悲欤歓ゝーはよ就く亦衰ゝーれ家ゐの業因母へと
問へバ家兄のゐよ母ゐの讐さるゐよるれ罪科家尊の怒よゝゝハさへ棄さ
るゐへゐ受けるれ慈悲とへゐさく外ゐさも訪せのゐぬ親胞兄弟を心ゐよ
ゝと恨ゝてゝ嫉ひへ晴く又曇る涙の雨よ箕虫の父へ鳴けど鬼の子れ母よ
ゐゝれ死後の恥世ゐ程へ養親連の貪欲邪悭よ身をおれるゐくそ

ぐくその恨苦しめ偶結ゝ妹と伏の縁ゝ果敢るく中絶く仇ある人ゐ伴れ倶よ
この野の土とるゝバ情死とや世よ誰まん冥土の障ゝへとゝのくなるぞ心ゐとるれ
る待ゝまゝへゝが丈夫へ故管領持氏朝臣譜代の近臣大塚匠作ゐへ孫
犬塚番作一戒大人の一子よ犬塚信乃戒孝とゐん呼ゝまゝる弱冠よ待るう。
ゝゝへゝが養母の甥ゐるゝともその心ざるいと正ゝく文学武藝よ暗ゝうを由緒
ある武士よ待ゝともゝ孤とゐりゝバ伯母夫許ゐを寓せく所領の田
園を横領せられいと窘ゝく待ゝおゝう。時運よ任ゝく人を怨ゐ欤待る
名刀あり。そゝその村雨丸よ待り親の遺訓よ年来の宿願を捕果さんとく
件の宝刀ゝ携乃く許我殿へ参らんとせゝ前夜よ伯母ゐれ夫婦の履きた
るくこの左母二郎を相譚つ神宮の漁猟よ假托く宝刀を掠習奪へせるゐ
左母二郎中亦好智をめく横取ゝく腰ゐ帯ゝりさゝともそゝぐゝバ良人へ

許我へ来べきぞ。いで宝刀をとり復さんとおもふ
甲斐なき死の深痍えぐれ水のあふれよふをさへ惜むを
良人の名ふさはしく願へあん刃の資のこもれる直ぶ許我へ赴死そが安否を問ひ
定めて宝刀を遽与あるべきよふそ。恩義ふ忘れ産の母の故を以て家兄
うつつそかるるいとのひろく忘れてぶ外よるべへる死後までの心かつ残果
させる大慈大悲の恩徳あん只願へこのるの聴容てぶ家兄の
君。頼む言葉よ声枯まく霰霄の虫と細るおいふ毎よ濆る血ーやよ
もべへるのうまけり道節ゆのく噴息ー母と母との故をのくられるう移くも女弟を
思んや夫をおふ今般の願言辞べるよあるねどもそ家事ゐく私ぐ君父の
讐を後おく私事を先よまるこーこれ月ごろ君父の讐扇谷定正ふ。竹
よろく一刀ふ総を復ぐんとおふ。その便ぐ残ざるこーふ不思議よるふ

いるこの名刀ぐ試めく讐ふ逸ぐ死宿望遂く餘命あべその時ふてそか
そとこいぬるーの
この夫犬塚信乃とかんが安否を問ひ、もおくて環會べ村両九を返さべ
けまこへ遇まぬるふーあまこ定うふいふけ打てるーこれか讐のふふ死るべこの
大刀も亦分捕せまん君父のねまぶとあるこの刃を亡ろ豈妹夫のるてありんや
負操節義へ婦人の道え忠信孝義へ男子の道え勇士の本意かくの如ーー
と理り迫く喃をふるん濱路へ至を夫のくおうべ何とおるん戸雛言を討て
の後ろうけりこーと心つ死回答ぐ忽地図塞りく一声苦と叫ひ仆
そぶやく息へ絶くけり道節験をそべとる死儔栴ある女弟う節操今般ご
遣せー修を肯ざるも武士の意地せめく亡骸を欲めて冥府の苦
悩を救んさふとくおそう抱死揚くー火定の坂へ推おるーー残まる柴を投へる
まへ夜風のまふくー堙火の再び燃くー煽くるー毘の煙へ鳥部野の夕もかく

やと想像る數刻いそぐめかりそまりて雲時襪を合掌一泡影無常弥陀方
便一念唱名頓生菩提弥陀佛をざろ〳〵と廻向ふ悵然とうく才を更て初禮
よーとく立も給ふまで又數回嘆息し大約法師の終を執る小柴薪を積てみん
うう焚を火化とるん唱ふるが朝ふ信濃る戸隠山の長明法師が鳥部
の野よ火定せらるゝ又紀州那智山の應照も終を火定ふ執ふーるゑ言ふ
釋書第十二巻忍行篇よ越ふるめるまハ大義を評んふる讃よ
愚民を歎化し火定の因果眼前妹が身を焚く茶毘とふれまる亦
いふの郷よ死いふの野ふ骨を埋ん定めふ死世のたぐまも後るを
先ふも北邙山頭一片の煙とふりふ天ふち
仰ぎ訣ふ死數化よ夜ハ深どろ〳〵ここの山と踰んとて彼名刀を腰よ跨ふ去
らんとする程ふ後よ窺ふ顧ハ濱路道節が問答ふ耦周ふ

負操義烈よ感佩ふの噴息の外ふりーろまー」勅よ彼処ふ到ふハ節婦乃臨
終を慰るよをがとるるべけ〳〵そ兄まま残訴まく物くまれ腰を折らん。
躯まくやく〳〵ふやまるふ端るく生を復つく〳〵ふやく移よ村
雨の一ト刀ハ左毋二郎が横畧せ残道節ふ及ふ落ふまを廻件乃大刀をめて
讐よ近つく便著よせんとそく濾ふ略が迷言をうけうざる事の趣よ贈淡れく肚
裏ふありふや。定正ぬーハ大敵ふ道節死力を竭ふとも怨残報んと輙うらざ。
渠輙ふまを大刀も喪ん縦彼人讐を輙ふく前諾よ負くとるく犬塚生ふ彼
宝刀を返ふ日のあまとのふとも火急の難義を救ふよ足うざ轍の勉よ水
飼ふ日を歴く枯魚を市ふ訪ふとも亦何の益ふあるさ思ふくも犬塚
生の安否のとく心ふと抱ふ名告く由を告るふも明く地よ大刀をとまを渠ふ
妹ふまを許さねばいふかぞまよ遮ふんや組織くとるまを復んとふひ決め脱を

道松

記るく瞬もせず窺ふに彼くの濱路を大股にく村雨の大刀を腰に挿副
玄玄んとくるとくしが舞者笠を傾むけ深く擒莖を内ると走り出く刀の瑞を
丁と拔て両三歩引戻せば敵もまた身を沈めて刀を横ざまに引組ると我も力も劣らず優と勇者と勇者の相撲なれ
ば寸分の隙あらばと互に出入替ふ拔放さじ曳くまじと互に立ちくる足を
踏鳴し沙石を飛し小草を靡かす時しも両虎の山より戦ふが如く鷲鳥の肉を争ふが
如くに果べくもあらばこそ額蔵が手来虐を放さる護身
嚢の長紐素早く道節が大刀の緒よりくまでもあく寅縁に跳むやあく
引組雖らとく嚢へ彼が腰に著ると弐取んとする狡猾やあく綾えん
道節忽地振ほどくく大刀を引拔元髪人と見えばこそくと投合せて
丁と發矢と戦ふ音電光石火と見めるを一上一下に煉の刀尖閃て拂へば
跳踰引ば著入と進めばくと。樊噲が鴻門を破るよ元関羽が五関を越るの日
孰う劣と孰う勝ん天も憑れ月の照と地よ亦茶児の小あり真夜中分
明々且二ばの間相挑く迷ひぞ道節悍くと駭へ刀を額蔵左よ受流せば
刀尖あまりて脱より流る鮮血を物ともせと丁と一せ一大刀風尖く道節が
身鎖の絲蟷刀尖あく裏徹く肩の瘤を砂傷まば黒血さらと濆る
瘤の中小物あるくん蚤の如く飛散くと額蔵が胸前へ礙と當る残落一と
虐と左よ楚と握當くと右よ刀を閃一又透間もあく刀結ぶ大刀とぢ侮り
かけまば道節ハ受とめ又受あぐ〳〵立やよ笨一等。いふるまで
汝が武藝甚佳と復雠言の大望あり豈一歌と死を決せんや。且く退け
といへせもあへを額蔵眼を瞪と。ハるる本事をそうる敢命惜くハ村雨乃宝
刀を誰よ。犬塚信乃が無二の死友犬川

莊助義仕ん汝が名八作ぬ犬山道松鳥髭ハ道節忠與宝刀を返せ！
敦圍ハ道郎呵々と冷笑ひ引ざま
大刀を汝ゑ與んや否そこでやハとゝく遮与と再び詰よせ附廻ー〻く跳
蒐ゝ丁と撃を左邉ゟ拂ひ右邉ゟ拂る道節ハ透を揚りく火坑の中へ
死入ら〻ハ發と立ゝる煙そも小徃方ハ
額瓜吐嵯と追
かゝく俯ゝ又仰ゝく瞻ゐ原来火遁の術をりく逃去ー欤残念ゝゝる
少ても道節ゟ奄口ゟ死生ゝ
火光ゟ
双の玉小等ー〻光も形も
ーと驚くりぐ小又とゝんかゝゝ沈吟ゐ忽地曉ゝ莞尒と笑ゝ此彼ゝび
あハをゝぐ彼犬山道節も終ゟ同盟の人とゝゝぐ因縁あゝんゟゆても

ゟ玉を。秘もゝゝゝ護身農ハ彼が腰刀ゟかゝ取ゟまろ。そゞ肉身ゟ生ゝる玉ハ
ゞゝをゝぐゐ入ゝるゐ奇異とやいゝん微妙とやせん怪ーとゐふもあまりあゝと。
これよりて推ゝゝハゝゞ玉も彼宝刀も孩ゟハ復る時あゝんそハとまれかくを
あゝ犬塚生ゞ許我の首尾心ゟ形き限ゝまゝゝの因縁あゝんゟハ
彼処ゟも神の冥助あゝべーいゝゝゝゝふゐふともゟゝよゝ許我へ十六里今東
間ゟ告るふよりゝゝ大塚ゟ立久りく復せんをゞもあゝんう。豫てハ假傷を
造らんとゐふ打うゝ幽場負ゝりこれも物怪の幸ひゐゝ欤と自向みゝゝ苔て
ゟ拭をゝく瘡を包ゝ又憖然と火坑を見ゝ。
及ざゝ心列郎義いと痛ゝくも感ふて日ゝゐふゝゝ腹心を
ゝーゝと死ーゝく必灵あゝん犬塚生ゟ再會せゞゐゝ男ゞ嚴期の心烈ゝ巨細ふ
告て後の世ふ夫婦一蓮托生の契を固うをゞゞゝ言のゟ向を受て鮮脫の

室ホ起ルの人南無阿弥陀佛と念ヽく退ル程ホ左毋二郎が亡骸ホ撲地と跌ル透ヽくと心ようち点頭刀を抜き首擲落ー倫の楫ホ仕掛ヽくその輪を推削ヨ黒キ斗の毫を抜出ヽく遠ーくヨ墨ホ染ルハ悪黨細乾左毋二郎ヵ或秘藏の大刀を掠ヽ又處女濱路を拐挈ー。その後ざる紙怒ヽくホ烈女を殘賊する天罰仍件の如ー年月日時と書つけヽそゞろく墨斗を腰ヨ納め斯書送せバ錯伝ヽく此彼情死ともするめるようん是も節婦へ追薦のことも是ごとくに歩をとゞめて磧川へと横ざり下ゞ駒込寺の鐘の声数ハ九ツ九品の淨利佛よ媚ざる壯士も輪廻応報眼前ヲヽく極楽水の西へと進む野ホ山ヨ其処も紅蓮の浪切暇ハ大塚村へいそぐる業下某生再説墓六亀篠ハ濱路左毋二郎ホを追留よとヽく人送りるヽく遣ヽそヲ形もヽく詰まる土太郎さえよ駈立て件の男女を追せよけまバナホバ九ヽをねヽく責つべー今ヲヽくと立ヽくろ居てアんの後

風ヨ指頭の花を取ヽまるる後悔其如ヨ立もどーく絶ホ空ー死夏坐舗ヨ尼流れもる蝋燭の涙と尺ヽも形るヽ夫婦ハ泣も合ヨまるど今宵ぢりハ二時が千年よれと祈るのヽ外面過ヲ人音ヨ或ハ濱路をねヽく来ヲ救と虚頼ヽく生ヽヲろ或ハ鮫上が来ろ救と剛突めど膳を洽せと庖厨なる美ハ水ようろふもヽろえつとヨ発肉ハいとうふホ半熾炭よるのとき食ごまとでも餓をお防えぞるの舞足の踏とろ伐知さとハ麻衣の裏ヽく袴の後の紐とるとヨ心ヨとりヽくヨ十九日の月高ー昇ヽ今ヽや夜中ホなりーしバ陣代鮫上宮六ハ媒的軍木五倍二と連拉ヽく墓六許詣まかけと谷麻乃上る礼服を著ヽまでも潜び来ヽの増ハ入ヨまハ後者をいと窓ーヽ一個の奴隷よ燈を引摂ヽ先ヨ立せ若黨両人鞋奴両人を後ヽく旦呼ハせりけれハ

あゞ夫婦八今さらふ周章くさんもべをそゝぎ亀篠ハ勸盃の塩梅分りくるくとそゝ
みそ〳〵く商湯よ起ちく彼此よ忙然さる婢女ハ〻を呼立く俄頃よ火を焚せ
炭火起させみどろさる紛冗更かりべくそ
書院の蠟燭を継くそく常さるよも戦さるそこら一遍掃出しく後閑ある式
る程よ墓穴を掘鳴くてそく盃を進ぶせよとそゝく催促さつまどる
〳〵く早朝りて有ど約と半晌許ありく
く恭〳〵く勸盃ぞ雛婢両人ハ美美の折敷を按排く桃子を執さをり當下亀篠ハ
為を却〳〵く宮六ホよ唇乾よ成迷る赤のゝひざる顔の色さ人生平よハあらぐ

本末融さぎいと離びざる満面よ白粉を塗著さる鬼のあさりか鍋の炭を
そそくふ塗添さうとハそゝぎ〳〵く賓を圓め目を細〳〵く阿諛のヨヌ辞を
傷痛けとべ宮六五倍二ハ呆ぬ態〳〵く笑を忍べ墓穴も妻の貝を足久
あゝく浅ましとぶのく白地よハさらまでをねく〳〵と促せ亀篠ハ
耳ももみぎ真顔よあるさく唱ぎけりかく賓主の口誼訖さかのく碗
の盞を取ぶ美美ハ味噌汁肉ハ鯰の筒切よ新牛房を梢細〳〵る田舎料
理も三醋七醋時よ取てそいと愛さうこと箸を揚さる宮六よ此二後よさく
五倍二ハけを吸ひ肉を夾めべ。ある無慚や鯰ハあぎ〳〵くいと黒ゝ灰
緑さる東菓子を盛らぶさり。気ハいふと箸おかけく折敷の傷み引
出せべ墓穴亀篠驚駭ぎく物体あ〳〵物ども麁忽よも限をあり言
語同断許さぬ人と勸解く折敷を引ゑく東菓子をゑゑくとり隠〳〵

只管外を庵下ゟ負せく義へ亀篠が心ゟ盛ーあれべ
さもとゝく人を叱るもゆるくぞと一座忽地そゝけこりかくと又盃を勧る實
主の辛讓果ーちやほべ宮六へ
雛婢ゟ飾せる歎待態ゟ宮六へ
含ゟる盃を擲ーく咬くと甚ーく
篠へ後方よりて肯を捺
宮六涙を推拭ひ武秋故実ゟ
と怨ぐほへ墓へ亀篠がそれ我心ゟ
醋ゟり丹二の毫忽ち愧く婢女
ろのるほべ人を外ろうもるく夫婦へ冷え汗を流ー額を席薦ゟ掘
埋めく辞有ーく勧解ーぐ五倍二さへ胃ゟーさゟ執ゟとゝ大ゝさゟらざ。

百へ蘭一の酒宴ゟるほべ墓所へいとゞ
彼ゝ障子ゟくへそほゟ
類ゟゝ色も似ゟゟ東藁子ゟ
その何ろあらんこの盃へ一巡ゟゝ婚姻の席ゟ更めゟろぐーと提撕べ宮六ゟ稍
憤り解ゝ又盃をとると揚ろあぐ夫婦へ欵びく銚子を引えさ更ゟ種ゝ
の酒殽を添て盃を勧る程ゟ夏の夜ゟるほべ短くてゟれ子の時ゟりゟろあれ
ども濱路を出さぐ五倍二頓ゟ焦燥ゝちぐく催促ゝくれば夫婦へ
困ぐ果ゝ軍木を傍ゟ請招ゟ暮六ゟろりひろゟ婚姻のるへ今ーそも仔細
ろくいへども濱路へ甲夜ゟり疼發ゟくいふもせんをゞみー僮僕ゟをゟく
只管醫師を請来せぐも小夜ゟるほべ醫師へさろえ入橋うけろ僮僕ゟ
さへ一人も帰ゝ来ぬ心苦ーくそゆへさべれ疼のるへーあほべいく日もあろで癒。

べ今霎時我せ男と眞一ゐ小耳語ども五倍二切ひけをそ八亦謂ふ一新人ゐ病著ある男ハ豫ゐ業知の婚姻を今さゐ翌まゐ待よ一ゐんやゐゐと趣偽ゐふゐハ新人の臥房へ案内その容体を一診せんある馬鹿ゐゐと敦圍ゐゐ声ありゐゐ高久ゐゐ亀篠ハ傷痛ゐゐ俱ゐ匂をぞ苦一めゐ當座脱ゐ)ゐ弾ゐ夫の袂を引動一今ハ隠さゐよもあゐぞ明ゐ地ゐ告ゐまゐさゐゐ勸ゐ墓六嗟嘆ん脇下ゐゐ冷汗を推拭て容を解ゐふまゐとゐあゐドよ。ゐゐまゐ萬ゐ更め軍木大人願くハ舊ゐ席ゐ著ゐ人ゐん疑ゐ釈ゐまゐさんとゐゐ五倍二ゐゐ乞ゐ一ゐりゐゐ乞ゐ一ゐ請ゐ隨ゐ復ゐをゐ當下墓六を身を轉ゐゐ再拝一賢公両所上ゐ在せゐゐぞふ欺ゐれをゐんや濱路ハ甲夜ゐ逐電せりと告ゐ残両人笈ゐぞ驚ゐ怒ゐ声をゐり立ゐ逐電せ一ゐゐ事済べゐやゐゐハ彼犬塚信乃ゐとやゐんゐ妻せんとゐゐ落一遣ゐ一欽又彼奴が拘て走ゐ一欽今速ゐ引戻せをゐそとのゐゐゐそを聽ゐや戻せ逐せと勝突進めゐ。両人齊一遍立ゐ。ゐゐけれ墓六ハ却ゐ胸を居ゐ平伏ゐる頭を摺縁由をも笈果ゐゐゐん腹立の酷一ゐゐ現さあゐゐるゐ旅ゐゐ且某がまゐゐをゐ一ゐ告ゐゐ一情由あゐハ渠を出一遣ゐんとゐゐ某夫婦ゐのびゐゐ肺肝を推き智裏を絞ゐ熟ゐゐ謀ゐゐ遠離ゐゐ渠ゐゐ近鄰ゐる浪人狐乾左毋二郎のゐゐ家材を估却ゐゐ郷ゐ逐電せ一と笈ゐゐ濱路を誘引せ一ゐゐさゐハその折時代報さゐ僮僕ゐを駈立ゐゐ追せさゐゐどゐゐまゐ逐ゐゐを又ゐゐもふてゐゐなゐる土田のむ太郎とゐふゐのを傭遣一間道捷経漏をゐるゐ追捕を蒐ゐ。ゐゐゐ

み告く叮嚀よ和解まども宮六五倍二ホ孤疑の厚解けぞ俱ホ怒る声ざゐ
実くそふ胡乱ん辯を振ふく陳ぶまとも走里ーとのふよ正ー紀證据ありぢ。密夫ハ孰もあまー聘礼物を受ふ女児とも
よそ親も同朋いひ釋ばるの後暗かり汝ホハ初より贈物残貪まく。
濱路ハ風邪よ臥ふと偽り今宵ハ痞が發まーとい。前後四道路の非戯
乱言呼詮濱路を生さまハ目小物凡せんと左右よる刀の琲寵けく。譴責
ふ威勢ホ墓六も亀縛も顔色まもく蓄さめく魂不とく身ホ添ぎ仰
寔よ理まそ寔よ然そと荅るのふ歯戦ーふく止ふまと勢酌の雛婢ホハかそれく

其処よ汚をそぞるふぬ且くーふく墓六を胸を鎖めく後方ふる脇挿の刀を
取ふ宮六ホがほとるをみさー措ね両君今その疑ひ紙釋せのらんとるがぱ。それ
刀を御覧せよこをハ是故管領持氏朝臣より。春王殿へ譲せのひー村両の
下刀ふり。信乃が父犬塚番作結城よ籠城そふるとき盗取さ脱去宣後よ
その子よ與ふ某このるをふる故ホいぬる日云云の術をめぐふー信乃を神
宮ホ欺引生ーふ刀を揚昏取ふそ豫てハ管領家へ献らんとおひけれど
當坐の貨物濱路がかをを朱へるとき。墓六が
誠心そ生と真さちふく件の刀をさー示せが宮六些ふ色を和けこの刀をとて
村雨ねとまるホハ正ー紀證据ありと。問ふよ墓六微笑ふ陣代いまご知てや
そふる村雨ねの太守特ふる引抜とれハ忽地ホ刀光より水気雷り殺気を含て
うち振ふハそホ水四方へ散乱ーふく驟雨の降るがぬー某既よ試をさり何の疑ひ

ゞ死といふ小宮六うち頷允現さるよりハ灰よ化のゝ且一見と取揚れバ龜篠ハ蠟燭の真摘捨さま〳〵寄まる燭甚を又引よせる五倍二ハ小膝を進め音よのこ笥く名刀をよき折うゑ一陋見せる某さへ福ひあり。さしくと勧れバ宮六皆ゝ引扱允る刀を火光よさ〳〵よせく皆ゝ共よ見をそなさゞ換れず水氣ハ顕まで見ハいふ。とうちかへ〳〵と刀ん〳〵も雫ハるゝ果ゝうち腹立て只管ゐうち振まバ猿方の柱よ打當く刀火此二曲りみけるを五倍二そ〳〵をゝ見を見ゝく天晴名剣水氣ハたゞ火氣纔帯る焼允るうんとあぎを笑バ宮六を怒まる面色朱を汲ぐく墓六を佶と睨まへこの白物謄太一かむうまの鉛刀を誰ゝ村雨の刀とおもうん一度ゐうまで二度ゐうまで二度ゐうまで飜る老耄奴覚期さよと罵まバ龜篠遽ゝく声ふり絞まゝいづれかゝゐ宮ふとも。いぬる夜水の溢まゝ戒ゝとハせも側よ見うるゐ戒とハせも果を宮六ハ今まる刀を席薦ゐ突立向ふさるゐ推曲まハ猶蔓の如ゐるゝ戒又引扱て投出一。汝ホかくても争ふ欲と五倍二も共倍よ酔容の癖ゐまハ挿もけうゝと腰刀ゐ及うち〳〵詰よ従まハ吐嗟と驚ぐ龜篠ハ腰うち扱一ゝくせんまバ墓六ハ口呆まま果ゝ勸解んとするゐ辞もあり。原来伎倆の裏をかゝくこの贋物を網せ一ハ信乃うるゞ死欲左毋二奴欲二人よ一人ハ違ハ一とゐゐおうう今さゐ小人を外ゝくおのが非をのひ釋べくもわうさまバ宮六且おそま一且羞ゝ忙一ゝく労を起一逃んとさまバ宮六ハやをゝく怒る血氣の勇倫児等と呼とゑゝく扱内を刀乃稲妻あびせ被うる一ト撃よ墓六ゐ指を砍うまゝく仰ざるゐ倒うる戒再ひ撃んとき果うゝ刀の下ゐ龜篠ハ轉ゐ輾ゐ宮六が向臑を抱ゑうる老女のちうゐも一生懸命五倍二うち見ゝ死鬼ゐ妨げまバ龜篠が頭堅吾を左ゐおかうまゝて引放さんとー作まゞども放さゞ人を咬まゝ主バ息の根留んと刀を引扱き肩尖

隠れ家の悪報
蟇六亀篠搆死を

ひき六
ひき六

四五寸押砍ふだうとぞんと碎ざう。亀篠深藏ふ雲時も沼堪ぎ苦と叫べる。
宮六ぎ後ごゐ蹴放さるその間ふ墓六を眺子血涕を投うひて枉さる刃を踏
直一且く防戦へども既ふ痛ひ紙員さうアけまべ進退いよく不便ん宮六ホを
さもアそと弱ふ出ぶる嬲數ぬ夫婦苦痛の声うハ枯まく鮮血の泥ゐ尾を曳く
亀篠四跋ふ墓六逃迷ひ蛇ふ追ろて七轉八倒さられ命ハ惜かうあるぬ脱
まんと同揃く折濱路左毋二郎ホを追うめく先さや一人うの事る背砍ハ背門
よろと衝と入てく庵温をふくも次の間へいゐ紀くも人一個もそぐ只宮六ホが
後者四五人賀酒ふ酩酊一く後者部屋ふ熟睡せるを故あるう婢女仰ハ大力
音ホ戦慄て悉皆逃亡ろ背砍へいろでう号をそるぐ主人ホよそを告ん
とて縁頬よる進を近づる書院の障子を引開ふ八目前ホ肉アとうち被る。
五倍二ぶ刃の光よ一声阿と叫びもあへぎ右の小鬢を砍裂まく後ざ毋ホ深落

つ。そぶまく簀子の下ホ躲まく苦痛を忍びく音もせざ。さ房程ホ宮六ハ怒ふ
乗ゝく墓六ふ數个所の痛ゐ仮員せる。ゐひの隋ホ力るめゝ五倍二ふ亦亀
篠が肩を砍ふ股を劈ふ十二分ホ苦せく両人齊一砍殪一ものく絶命を刺
ろる浩処ふ額藏ハ圓塚より殊さろ小歩をそ毋めくかり走ホ貴夜中ゐふ
諸折戸をいまぐ鎖ざる主家の光景ゐろ汚うく。と進を入る裏面ホ絶て
人気ろく書院のうふ倒るく物音嘯ぐ人声ーてけまびりく驚死怪ういそ
ろく草鞋を脱捨うく走ろく其処ふ有ふへある下夫婦ハ砍仆され仇人ふ
日ろ怨ろる陣代簸上宮六と属伐軍木五倍二ろるのく胸ふ乗懸ろく
刺ろる刃を引抜ゐ拭ひまり去らんとまる程ふ額藏吐嗟と懸塞り御両所何
処へ逃去のふぞ下司ふ逢とも主の讐いろでく脱をくゐとぞいせもあへを両人倍
ふ陣代ふ無礼ある村長誅伐せられふ諸声立命をそろぬ愚心人ろる

帰村の夕
そうこまもる
仇を殺す

奴婢ホハ連坐をおそれもせで
蔵を誇りて欲著る刃を外ざく寿合さを左右の拳を働ざく両人ハ利脱を楚と
ぞんざく動せどもさんかうろたへ冷笑ひ荘官ホ越度あらバ同住所でこそ罪を糺
さめ毛検の折みもあらざるホ各夜中の来臨ハ酒喫んとの為ならバ下郎ども
亦五常あり主を斃せざく阿容ことと讐言を日送る法あるや推ろバべて雌雄を決
せん。かくいふハ荘官が庭子よ多くの小厮額蔵敵ひまなく足ようさとも立あがれ
よと突放つ双ろの死骸力勇悍よ両人ハ膽を冷ー捉ろまゝ脱ハ脈絶て推ろ
ざるまゝ覚ホ逃ろとも覗さでと双方よりと声をもうけざ復打ろる。
刃の下を閃と潜ざく懐刀を抜合せ二人を拄く戦ろろ所要の善悪異られ
ども今額蔵が含ろる刃ハ前の夜よ亀篠ら信乃を斃てとざく投ろる大塚西作三
成が数戦を経ろる鋭刀ありとぬ
ハ素より稀世の豪傑自得の武艺法ホ稱ひざく。

秘術を盡を倉皇ホ突戦いまぐ寸合ホ及ざーく逃んとーする宮六を脳より九の
命の下まぐく幹竹割よ砍殪し返を刀よ五倍二が骨間を礙と砕ガバ苦と叫ざく
逃走る弐逃さでと追ろ程ホ宮六五倍二が後者ホハ後の大刀音ホ驚ろ覚て庭
門より走り来ろと見ゑバ戦上を既よ斃ろまざく軍木ハ痛ひを負ふも外面ハ図ろ
とざく巻石ホ礙と跌ろ向ひ遠よ転轢びざく股ろべくもあらざまハ件の若黨西
人ハ己ろを得を刀を抜連を額蔵を駈隔ろろそ間よ両三人ろろ奴隷ハ五
倍二を肩ホ引被け或ハ足と約ろ花前を投ざく倒さるぞ額蔵ハ
怒ろる虎の群ろ羊を駈るごく瞬間よ彼若黨と左右へ撲と砍伏せざく。
再び追んと支生ろ衡門の邊よ濱路左毋二郎ホ弧追ひろぐとざく貪共倍よ
立かゝる僮僕ども小交遣けり。このゆゑ
驚騒ろざく矢庭よ持ろる六尺棒を横ホよ連ーざく出ーも遣ろぞ推禁め。

事の様子を問もあり。我ハ刃をうち落し〳〵縛めよと罵もあり〳〵只囂と叫ぶのみ進むあり一人もあらず。額藏ハ情由もあらぬ僮僕どもを抑立せられて只管ら焦燥ども同士撃せんさまがまして五倍二を撃偏らん。今ハ追ふとも及びがたしと思ハ血刀を拭ひ納め且衆人よりも對ひ〳〵あり夫婦が撫死のる仇人艘上宮六ホを撃留るよりを告〳〵引〳〵書院より赴けバ衆皆呆れて是非の分別そこそこのみ只陣代を警ふり一連坐をおそれ〳〵忙然そのとを額藏又いふもう夜も今宵小夜深て下総より飯村をされバ事の起ハ汚ろね尤主人夫婦の終り折還りあハせて〳〵かくのごし。五倍二脱去るとハ天も明バ城中より檢察の警兵来るべし。遅くハ同注所へ出訴〳〵復讐の趣を詳よ述んのち今宵のるハ各位の啓るとゆもあらざるう好ま夕も額藏が「已のみあるべけれとそ必ずし狼狽のふる婢女ども怕迷ひ〳〵逃亡うとせ彼ホを索〳〵聚會

（山青堂藏）

ふ人一人ありともそもそとのぐ。それよ疑ひ彼らんそこそこのさろ汚肝要えと説諭されく衆人ハその識量の嘆服一のいと感〳〵そひけり。○作者この段を創そて。

さり護よ賢しそ云善悪応報果せるそろふぎさんめろぐうえ六が不美残忍の甚しき神ハ怒り人ハ怨り是この奸悪と貪枉女と夫とあり婦とのれり。

ヒの故ふ家ゝ鯆べ死の子あり外よ資べ死の友あり彼ホが大慾貪て飽ま死そうさる故よ日とりく煩悩絶るところ竟そ其の悪縁を結ぶ亦及びく亦許ヨの心と苦しめ已が謀る所還〳〵人よ謀らるを寛後ふまよるの死辱を受て宮六ホよ屠戮せられそうもそれだるの不幸ありく額藏あり。一人義よ勇〳〵好を鋤死悪と扱り。

吁義るるか額藏汚吏の家よ住れども清死ヒ泥中の蓮の如し赤よくその主の非と神ふく信乃がゐふ謀るふ方あり不仁の主を主とせ雪中ふ栗殺せられし。毋八為よ怨を舒ぶ又一飯よ露命を輟ぐ已が為よ思るしとせぞ今その雖言を聴ふ

及びく亀篠が投くる。そが親匝作が遣刀をもぬくく一人の僕さる道を盡くく。
取縋純の外を辞せど。噫賢きかな額藏宜忠義の人とをゞ一

第三十回

芳流閣上小信乃血戦を　坂東河原より見八勇を顯す

却説その曉うこか近鄰の荘客村のか翁ホ襲来く事の疑紙向諦め或ハ向注所へ告訴一或ハ額藏ホをうち護卫をる程よ天ハ明く六月廿日もやゝ已の比及ふるりかけり。浩処よ艘上宮六が弟艘上社平軍木五倍二が同僕卒川菴八ホ許ヲの火兵をねぐ荘官屋敷よ来ハ荘客们よ案内さそ書院の上坐小床几を立させ且此彼の死骸を展検一ろく額藏ホ圖ゼの奴婢を悉召よせく事の顛末を訊問ふよ額藏ハ主命よりて一昨下総ろる栗橋へ赴ゼ昨夕更闌く旅村の折主人夫婦が熟ゝをこゝろホ忍びど當坐ホ讐ホ報ふとハゞも勉よ若黨ぞろホ杜ろを剌傍輩ホ抑留せられく軍木殿ハ数ヶ漏し迭恨限なーとハ又濱路左毋二郎ホを追さりける僮僕们ハ宮六濱路が婚縁のる并ホ昨夕堺入のる又濱路ハ甲夜よ逐電せーらゞホ、追留んとく食彼此へ奔走し終よ及ざーとかゝる折衝門のわろ少ゼ額藏が血刀を引提て走ろ出るを憧見けまゞうち驚ろく推留ろのく菴六夫婦が殺されーるも又額藏が陣代を害せーるも一切こを我ろゞとハゝ當下社平ハ声をふり立かまゞ額藏が中状始終甚胡乱こ旦既よ実を得ろり。彼奴ハ亀篠が甥なりとゞ知ゼ額藏ホ外ゟれ已ハ更よ間戻一く主の金銭衣裳ゑゞを盗ゼんとハる狂ホあらー夫婦よ外ゟれ已ハ得ぞ墓六亀篠を砂殖一く逃去らんとせー折よゴゞ兄宮六ハ属役五倍二共倡よ品草濱へ遠足のかゝるさたまく湯をこんとく墓六許立よろく不

意我殺めまつらく命代限し若黨さへ害せつまでく五倍二一人脱れ去れりこハ
五倍二が告訴の趣みく実説とおもふ足まりのふとおもへハ年来村の名帳お
載さる犬塚信乃がをうばおもへハ第一の不審之又ひろ兄宮六が後路を撃る
ゑどのめく究めるる虚言えいろふとおもへハ陣代ハ嚴官え村長ハ卑職えこの
婚縁相応うらぞ況城主の免許を請ざらく墳入ととりふるのあらんや
加旃。昨夕圓塚の山中ゑく細乾左毋二郎ホまでく四人を砍殺して怪しき
榜を建さるのあるこゑも亦信乃扶額藏奴が所為まつく件の贖路を左
毋二郎ゑ害せうまでさうとおもふ底ふ死伎倆なるべし且下郎の分際そ
陣代を害せるの律ゑおいく大逆さり何ぞ仇討とおよーあらんや。
今彼奴を八劍みく兄の怨を復さえとハかくもあらぬ所約あまでも
いまぐ主君の免許を須ざーハ私怨成報ふよりろーよりく宮六が亡

骸をそゑ飲め且その讐を搦捕んと為ゑ卒川生を相伴てくく額藏奴を導め
よく威勢猛く下知をまでぶ兼ねこと心もあくを群立かる騎兵ホを拄る顕義些も
駈るぞそく厥原の仰くもそれりまでぐ大塚信乃ハ一昨の曉討我へとく起紛ぬ衆
人のそる所え當坐の羞を暗めんとそ狡黠を島と宣ふとも蔓六夫婦が横死の
つゆ姉女ともてそく知さまで忠義ぶみ卑賤の差別なーー主人の讐を報さりとそ
大逆とせよまでく縛を受かく鞭の證人ありさぐら贈おをりくせうまんそ。
井心ぜさる所えさでも公道ろべやと理但さる大勇ゑ騎兵ホもゑと下！
ゑ阿容ととーく護てをりこれより巷八婢女们を推並ーく。その夜の
為体を訊問のゑ食社平が亂ゑ呆敢ここく回答せをろびくく
向れさ一両人大刀音のおそろしきあよ背門より逃去給りーぶとべてハ知ごぞ
と答けり社平ゆく冷笑ひされバこそ蔓六ホが害せるるをゑんさるものをー。

又証人とまろうどあるじや彼奴いくでう実を吐んとく鞭ぶち
なろそそ 焦燥折ふし簀子の下ゟ人あるとく嘯く声〳〵けはゝ衆皆驚怪こゝろ
人をう立く躰よく引出〳〵ゟ見則別人ゟゝゞ墓六が老僕荒助也昨夕五
ゞど 倍二ゟ小髪を砍らるく簀子の下へ後入ゟ遂ゟ息絶ゐるゟ今潮ゟ甦生〳〵く。
幽ゟ声と立ゐる燈僕们いこのゐ体よ復駭ざるものをゐく昨夕和主がかゝう
ゐゐ 猶一遍索れゐりいつゝゝ殘を眉ゐる縁
ゐゐゐ 枝の野狐ゟ魅されぞやとそゝのう
う 由をやあげよゐゟ鈍まやと勤ゐろ縁頬へ推上ゐゞ菴六間逸く立よりて。
そのゐう成乳明ゐるゟ貨めへ昨夕傍輩ゟ先ゐちくかゝう菴六夫
婦が殺ゐ折ゐゞ〳〵く縁頬より書院の障子を開〳〵ゞ五倍二ゟ小髪と
砍らるく仰さゐゟ浪落そゞゐく簀子の下ゟ躰れく額藏が仇を報ゐる。
為体いくゐろうかつう握ゟ金庵痛ゐく。その後のその成行を但敵上數軍

未殺よあゞ夫婦が殺ゐるゟハ一定相違るゝとのひけを既ゟこの證人あれバ社
平ハ今ゟ以ゟ証ゐさをろくく菴六ようち對ひ衆人もろくゐ
そく獨背ゐが側杖打ゐ聞論のある体をこれとゝいゐを訝〳〵かゞとや虚実ハ
多聞ゟようの成業一人を證とゐゞ〳〵密ゐるゟ背ゐ奴も額藏ゟ支黨ろう
さゝゐひのゞゞとゝくゞ菴ハ異議ゐく現さるゐもゆう且額藏ゟ禁獄
ゐて事の数成鎌倉へ伺ゐあげ射の殿大石兵衛尉憲重この時る在鎌倉のあん下知ゟ任ゞべ〳〵かく
ゐゞ退〳〵く老輩と商量〳〵舎兄のゐゟ耶を雪め当所のゐゟ恕をかゞそのようみと
ゐゞゞゞてく是非を論ゐんゐろく〳〵ゟ外ゐろ〳〵且穏便ゟ退ゐんと耳語婿て和解ゐり
これより社平ハ准備の轎子ゟ兄宮六が亡骸を扣乗させく彼若黨が死骸共へ
倍宿呼へ遣〳〵又額藏ゟ枢を被け背ゐを縛ゟち乗せて荘客ゟ舁〳〵
つゝ卒川菴ハ共倍ゟ城の向往所を指くかゐの去ゞハ敵兵ゟを額藏を牽立く

後れ後れ先よ立陸續とて退り詰分両頭さ程ゐ犬塚信乃戌孝の十九に
朝さ立ち出よ栗橋の驛よく額藏と訣を遂ろち幾里もあらく許我ゐ赴く城下の
町ゐ旅宿をトく御所の業内を問究め執權横堀史在村ゐ第よいもとく
名簿を投ー由緒を述亡父大塚番作が遺訓ゐ隨ひ昔御所の兄君春王殿
より須り守ゑろ村雨の宝刀をおく推奉せー事の趣則執次乃若黨よ
由緒と軍功を糺明め御所さ申ゐ侯と稍久くて在村出ー對面ーるほその父祖乃
よろく愁訴をくけりかくく侯よ鎌倉ゐ在せー比持氏朝臣の舊臣結城
成氏を討死せーめ子孫を悉召さよー折番作ゐ給ふ宝刀さへ披露せ
むく討死せーめ子孫を悉召さよー折番作ゐ給ふ宝刀さへ披露せ
ざるよ信乃ゐ親番作が深痍よりて遂ゐ廢人と
ざるよーゐのろの故そと詰問ゐよ信乃ゐ親番作が深痍よりて遂ゐ廢人と
なりしを又伯母夫大塚蟲六がうる我告く遅系の疑ひ我いひ釋よその辨論
爽ふく敢伯母と伯母夫の奸悪を顯さそ又唯亡父の義氣を隠さそ言寃分

そく修ふく職り遠意細ゐ申ーく侯えざるとるー在村ゐその才幹ゐ驚てこそゐ
こよ我忌とのくどもさてこべそよ
みてく持系の宝刀相違なくゐ老臣ホと相譚ふく近日御所ざゐよ侯えあげん
旅館ゐ退ふく侯さもよとのめよ申ふ多く安堵さる信乃ゐ唯ことふく領兼ー
眺ふ客店よ立ふまゐその日ゐ既ゐ暮よけるとかくこそめ詰旦信乃ゐ忽地ゐ思ひ
ゐ村雨ゐ名刀ふまゐ先考年来こよを巨竹の筒ゐ藏めく梁よ掛ふりーうだ
一点ぐふも錯ふるなー大人の刃まふまのひくゐふよ亦年来腰ゐ帯挟よ
建く盗難よありとのふーのふ抜試るふりれさればふく今許我驗ー
進ふまるゐ刃の塵埃を拭さふんゐ准備ふれよ似ふまかくゐ旅宿の後然ふるゐ
よ死ゐまさふふとそのゐ傍よ人のふれ隨ゐかそふ障子を引閉ふく床社の
ほとふふゐ坐を占め件の大刀を左ゐゐ含ふくまゐ鞘系い蟲壊を拂ひふんぐふよ

鞘を推拭ひ引揆そく刃をうるふ村雨よくあらざりけり。これ又
直一く熟視るにその長短八等しけれども焼刃八全く似るべくもあらず。
思ひうみつるのみならず腰に帯ざる日もあるべしと揚音
大刀を片晌も傍に置ざる時もあらく。
らまくそ一欽とおもひあはするに神宮河の私中のく荘官ら囮まつられて水中へ
陥ーハこれを害せんあるのくまぎれく。左毋二郎さへ相譚まこゝに荘官を殺んとそ。
続く水に入ーよ独彼奴八船に在りそのーよ揚音彼左毋二郎が人
とおもひ遊藝歎曲をよくうるのを武器をぬきめくるのをと日ごろのよべ由断ーく」
その折刃を接るもこれを且夜間のるみーく荘官の入水成敗ひー事小紛
疑ハざるその霄よりきのふまでくるー一身の進退よ他妄を見くる遑なれ。
事竟よこゝ及ぐり唯前門よ虎を禦く後門より狼を進めらる成ぞざり矣。

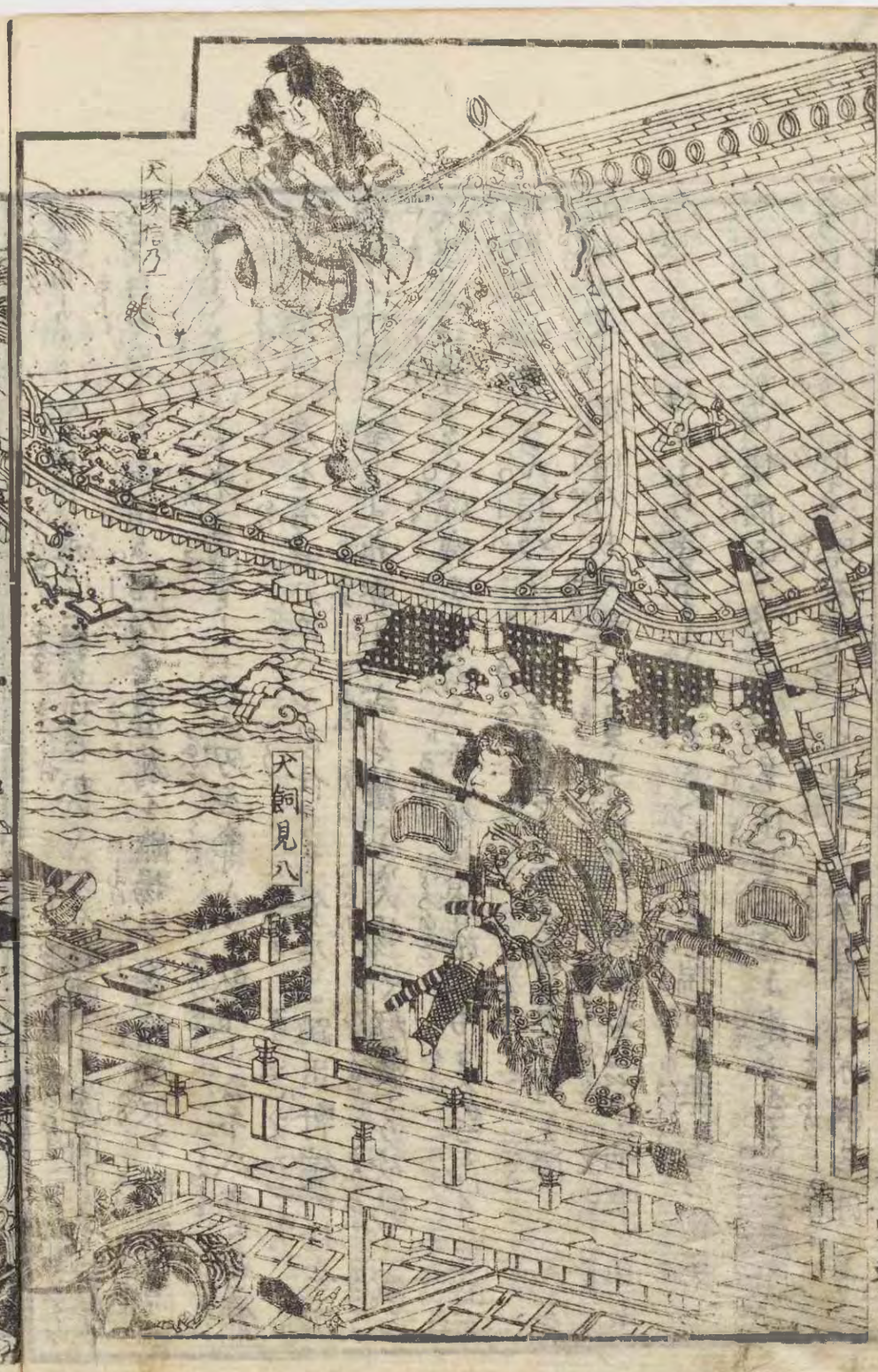
これ愚之既よ宝刀を喪ひくれ父よ不孝の子なるべく君ハ不忠の臣
ころべーこゝ何とせんとぞくふ怒是よ
速恨後悔よおせんまべいるのくりけるよ。かくてあるべしよあらざりけり
つ。数回歎息ーに宝刀八貴物なるこゝを知るぐく許我殿の召を俟バ
撫筒をとう生く。竪を撫拊膀の紐を結びあへを両刀を跨く立地へをる
往よ忽地城中よるゝ横堀在村が使来まう信乃をいふく
対面まるゝ使八若黨両人と奴隷を招ぐく。柵笥より一領の衣裳をとう出て。
これを信乃よ進めくらの給う此度進上せらるゝ宝刀のる今日老臣達の一覧と
竪く御所の見参よ入るべけれ八速よ登営をゑへよりて時装一領を賜るものの
横堀殿の指揮よりてあん迎ふ為まうらく出ゑとらふ信乃彼のく兼記ー。

仰兼りゆひ名某も亦ト上つ兄ろのあるをり折よくそあるを聊かの日あるべ横堀殿まで使ひ賜はれ衣裳ハ且く領けまゐらせんと詞あやといひけれど遠ーく走り出るべ使の若黨も歳ホくて大塚信乃ハ頻ニ進く在村が当家の對面を請ひけるもや登営ーく宿所ニ在ることを聞くべ又史ホ件の若黨ホ導せられて営中へまゐる程ホ今ハ衣裳を更ざるべも不敬ろべーといふよろん届のおとりまく彼礼服ニ更めまゐより謁者の甲乙ホ儐せまゐらせ遠侍ホ赴けバ縛ゐや厳重ニまく在ば在ろ弥ろどこの故ニ信乃ハ宝刀紛失の歎ホ許るホよーろくいつ心ニ苦めけり且ーく件の謁者ホ又信乃ニを儐ーて謁見の間ニ赴けバ上壇ニ畢簾を垂く成氏朝臣の相を儲そが下ニ横堀史在村そのさ他の老臣侍坐ろる左右ハ殿の近臣磨ろべ又廊下の遠ニ身甲ろろ武士数十人齊こうく非常を整め整こうく列を正せり。その体ハ晴ゞまーくろえさりけり既ニして成氏著座ろべ畢簾を巻揚らるど。當下横堀在村ハ遥ホ信乃ようも對ひ結城の城ホく戦歿の舊臣大塚匠作三戍が孫犬塚信乃そのの亡父番作が遺言ホ随ひ當家の什宝村雨の一刀ニ献るる神妙ニ思召る且吾们一見をべーと大刀を進ぜ史といるニて信乃ハ一期の浮沈とそんど騒ぐど頭を擡。さハ件の宝刀ハ年来盗こそんとて隙を窺ふあゆゑろかくく某今朝ーも刀を拭んとく引抜ろニハ浅ようく舊の刃ホあらざーくろの程ゆ揖揖らまさり。ろひろけるの兄ろのるニハ且駭兄且悔こ膓ニ唾どもろべ甲斐文ーよろこくこのろ弥訟ヤスべれろよ推参せんといふホ打あん使をろろく慚愧ニ堪ざ呼存齟齬せり。あゝ数日の宥免を蒙りて失こう宝刀を穿鑿せバこう復ざるとハあらじーこの装を顧ひなるとのゝせも果ニ在村ハ

忽地怒る声をふり立そは甚しき麁忽え失さうとの〻證拠はあらじいかぞや。と
敦圍譴さる氣色のみ信乃は些も臆せどもん疑ひは理え遠侍ま阿ねる墓がお
〻の一ト刀取よせく御覧せよその刀こそ村雨ろうね鍔も鞘も縁頭もその表裝ハ
舊の侭ぇこま揭うえてさる證ぇこそとのゝ紙ハ聽ろぐ冷笑ひ嘉吉ろり今ぬ至て
さも四十年ま近し六七十の翁ろくおハよく認るめ稲ろうんロいその證ところ死のハ
刃ろり立ろ水氣のこ〻ぬま這奴ハ敵ぐこの間諜者ぬ疑ひるしく生拘れと焦燥ぐ
御下ぬ列坐さる戮の力士群立さる信乃ハ横堀在村が漫ま權を弄びく賞罰と
已がまゝめし人を容るその器量ろれこま阿容ぐと虜ぬろぐ竟ま渠が
てしぬ死ろん脱さうぐそゝひしくハ組んと競ぐ力士ぬ伐右ま拄え左ぬ投退
後ぇころ伐ハ丁と蹴倒しぬ飛鳥の如く身を働しくほふゑめよを附む翠簾
の内ゆ成氏朝臣その性烈しく短慮の大将裃を蹴放ち身を起しく彼
[illegible]

戮ぬ留よしく下知さる人ハ兼ると戮の近臣ぁのくく刃を抜翳しく透間もるく攻寄ぬ
さる白刃の下をん潜る信乃ぁ畳薦を蹴揚ぐ篭楯を取く防死留禦と
揣ろくぬ飛ぐま先ま進ぐしく一人が刃を奪ふく砍殪しる不ハ方へ薙ぬ靡
けて十餘人ま殘を員せ八九人を砍伏せく賡庭ま跳出軒端の松を未
他ぁるく内りと屋上ま飛登ぎハ戈ぁ鎗を突揚ぐ蛭巻ぁり砍断ぎ戈ぁ
矢庭ま追登るく深殘を員ぐしく一雫湖ま滾落るゆ多かるまけり暫時の
闇戦その甲斐ぁるく信乃一人ま砍ぇらまるく血ぁ泳鹿の野を漫しく屍ぇ
朝歌ま累くさる信乃ぁ浅殘を員さりけれハ鮮血を啜るく咽喉を湿し。
屋根ぁり屋根ぁうち登るく脱去るぐれ方を揣る要害の物見と
名つけさり信乃ハ脱る路を見んとく攀登ぎハ城溝を瞰こさる

犬塚信乃
犬飼見八


犬塚信乃
犬飼見八

大河ゆく流を窗の下ゆ引ゆる水際ゟ快形紙鳶ゑゝう。こゝ俗ゟ坂東太郎と唱へゝ八州第一番の大河ゝう。その下流ハ葛飾ゟる行徳の浦曲ゟり巨海ゆ朝ゟる咽喉ゝう更ゟ後方を見ゑゟバ。こゝ首の廣庭彼首の城戸ゆ数百の士卒屯ーゝ射て落さんとゟ弓杖擲ゝう進退ほとゝ究ゑゟゟ敵あゝバ登ゟりこゝ来ゟ組ゝ戦殺せんものをこゝゆ外他ゟるゟるけりさる程ゆ前管領成氏ハ黙の士卒を給せゝまをゝ怒ゝうゝ力士を聚會信乃を搦捕るのまを口恩千貫文を賜ゑべーとおちもなゝ。物ゆく徇させゝゑどゟ彼武藝ゆ看懲ーそ業ゝんとゆゟるーー當下執權在村ハ成氏ゟ稟ゟ。獄吏犬飼見八信道ハちん抜萃の職役を固辞まゝーー憤強ゝく身の暇をゝこをゟりーー外ゆゝう月ゞゝ禁獄せゝゑまゝう渠ゟ古人二階松山城ゆゞ武藝允可の高弟ゟゝく就中捕物拳法ハ本藩無双の力士ゑ且くその罪を寛めゝく信乃を擒捕せゟゑその功成ちバ見八ゞ死罪を赦さん又信乃ゟ殺ゝた惜むゞ死のまゝ。誅八ーの。

いづと真ゝこちゝく薦まゝせゞゝち行ゟるゆぞ。在村ハ時を移さゞ件の犬飼見八を獄舎ゝう牽出さゝゝそ縄を緩ゝく。大刀身甲脇指腸肴ゆ十ゝを添て取せよけれバ見八莽ふ私名ゟゝ謹て領業ーー。先ゝと稽ひゝく居縮まゝゝう足踏試を在村ゟ辞別ゝゝ。三間階子を走登るゟ猴の如ーー孫廂のあゝゝう茅流葺の管棟ゟ血刀引提ゝ立ゝう信乃を遥ゟうち瞻ゝく些も擬議ゟる恋ゟ渡る樓閣の甍を踏ゝく進む程ゟ成氏ハ在村ホ老黨近習數名ゝく廣庭ゆ床几を立さゝ。ゟゟ仰ゞ瞻ゆ主後ハ陥ざるめゟうゝ口ゟ里竟犬塚犬飼両雄の勝負如何ゟ編を嗣ゞ巻を更ゝ第四輯の端ゟ解ゞ出像を視ゝ赤龍ゟ味へべーー。

里見八犬傳第三輯巻之五終

編述　淨書　千形仲道謄寫

出像　橋川重信繪画

裏人　中村喜作

家傳神女湯　一包代百銅

婦人諸病の良劑なり　産前産後ともに用ゆべし　その功神の如し　又うちこぶうるほひ　用ゆべし　急ぐをとゝのへんをとゝのへ　ふくく八色紙よりもうすく　真物をそゝくこゝろ　ほとけの加なんをあらそ　方皇重すべく法よ　ぎこそ製方むつかしきまゝとゝのへてその功神の如一別に能書あり今略之

精製衣奇應丸　偽薬をのぞく為　きつく製方むつかしきまゝとゝのへてその功神の如一別に能書あり今略之

大色三百粒餘入代弐朱　中包三十六粒入代弐朱　小包十二粒入代五厘

婦人つゐむの妙藥　毎月つゐむ　半包代三十一粒

半包代三十一粒

製藥弘所　江戸元飯留町中坂下南側四方みそ店向　瀧澤氏　製

同家出張所　日本橋通神田明神石坂下同朋町東新道　瀧澤一平伯

取次所　芝神明前　いつきや市兵湯　大坂心斎橋筋唐物町　くすりや太助

著作堂隨筆　玄同放言　三巻　天地部草木部人事部の上まで出板　全九冊

名山閣　東京芝大神宮前書舗　和泉屋吉兵衛發售

大阪
河内屋喜兵衛
同　伊川屋善兵衛
同　數賀屋九兵衛
同　秋田屋太右エ門
同　河内屋喜兵衛
同　河内屋和助
同　秋田屋市兵衛
西京
同　出雲寺文次郎
同　勝村治右衛門
同　上村勘兵衛
同　杉本甚助

東京
須原屋茂兵衛
同　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
同　丸屋善七
同　和泉屋市兵衛
同　須原屋伊八
同　出雲寺萬治郎
同　榎屋喜兵衛
同　辺江屋半七
同　長門屋龜七
同　三家村佐平

十五